

「第40回全国中学生人権作文コンテスト」  
和歌山県大会最優秀賞和歌山県人権擁護委員連合会長賞

## 未来へつなぐ違いを認め合う心

和歌山県立古佐田丘中学校3年 <sup>たわら</sup> 俵 <sup>のどか</sup> 和花 さん

「おいしかったです。」と私がお礼を伝えると「いつもありがとう。また来てね」と少したどたどしい日本語で笑顔で返して下さるのは、よく行く中華料理店の店員の方です。

今でこそ心地よい関係が築けているのですが、実は私は、自分の勝手な思い込みから、この中華料理店の店員の方に対して偏見を持っていました。

家族に連れられてよく行くこの中華料理店の店員の方は全員が中国の方で入店と同時に店員同士が掛け合う強い口調の中国語が私の耳に響き渡ってきます。席に着くなり「カタン」と勢いよく出されるグラス。弾みで周りに水が飛び散ることもあるのですが、お構いなしの対応。そんな店員の方に対して私は不快さを隠せず、そっけない態度をとっていました。私にとっては、店員の方が話す中国語の口調がとてもしつこく感じられ、雑と思える接客態度も重なり「中国人は常に怒っている。」という私の思い込みからくる偏見ができあがっていました。

そんな時、私に日中韓三ヶ国の子どもが集まり共同で絵本を製作する交流合宿への声がかかり参加することになりました。

しかし参加を決心したものの当時はまだ五年生。日本語しか話せない私にとっては、国も言葉も違うメンバーとどうやってコミュニケーションを図ればいいのか。とりわけ、中国のメンバーとはうまくやっていけるのか。様々な不安がありました。しかし、いざ合宿が始まると不思議なほどあっさり、その不安はなくなったのです。合宿に参加するメンバーは全員が初対面、みんな「相手を知ろう」「仲良くなろう」と同じ気持ちを持っていました。そのため身振り、手振りを多用して表情を生かし真剣に伝えようという姿勢を見せることで心の距離がぐっと縮まっていったのです。ただ、一週間という日々を共に過ごす中で文化の違いを感じた時もありました。私も含め日本人は、協調性を大切にします。「みんながやっているから自分も」と周囲に合わせることで安心感を持つとうとします。また相手の気持ちやその場の空気を読み、ストレートに自分の考えを伝えることを控える文化があるように思うのですが、中国や韓国のメンバーは「自分はどうか。どうしたいのか。」はっきりとした意思表示を好む文化

があることに気付きました。実際、私は自分の意思よりも相手への気遣いを優先したことで逆に「周りはいいいから、あなたの意見を教えて」と言われ相手を不快にさせてしまったり、自分が本当にやりたいことができなくて相手への気遣いがマイナスに働いてしまったこともありました。そんな状況に「相手の気持ちを考えているのに、なぜ分からないの？」と心の中で苛立っていた私もいました。

しかし、この経験をあとから落ち着いてよく考えた時、たとえ隣国であっても、文化や価値観に違いが生まれるのは当然のこと。私自身、日本の文化や価値観が最も正しいものとする優越意識で異文化を見ていたのではないだろうか。と考えた時、ハッと気が付いたことがあります。この違いが、偏見や差別をうみ出しているのではないかと。

私の中華料理店の店員の方への偏見も、国が違う、言葉が違う、日本と違い接客態度が雑と、違いだけに注目し、店員の方のことを何も知らずとせず、その違いに嫌悪感を抱いていた私がありました。しかし、中国語の抑揚が日本人にとっては怒っているように誤解されやすいことや日本の丁寧な接客態度は、世界では決して当たり前におこなわれていることではないことを知った時、失礼な態度をとってしまったのは、むしろ私の方だったと気付きました。

その後、私は、この中華料理店に行くと、自分から挨拶をおこなうようにしました。すると店員の方も笑顔で返してくれるようになりました。接客態度は変わっていませんが気にならなくなりました。「違いを受け入れる」という私自身の心の持ちようで私の偏見は自然となくなっていったのです。

この広い世界を見ると、肌の色、宗教、環境、文化、価値観、性別等、違いはいくつもあります。違いがあっても当然なのに、私たちは、「こうあるべき」という固定概念に当てはめようとして、当てはめられない違いに否定的な見方をしてしまっていることがあるのではないのでしょうか。それが偏見や差別につながっているとしたら、相手を知ることの大切さと広い心で違いを受け入れることの必要性に気付かされます。お互いの違いを認め合い、良いところは取り入れる柔軟性も大切なのだということを一週間の交流合宿の経験を通して、今、私が感じることです。

これからの多文化共生社会に向けて、私も、謙虚さや周囲への気遣いという日本人ならではの文化も大切にしながら、場に合わせ、はっきりと意思表示できるコミュニケーションスキルも身につけていきたいと思えます。